

二〇二五年度（令和7年度）

# 横浜女学院中学校

## B 入学試験問題

令和7年2月1日（午後）

# 国

# 語

### 注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、21ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名



— 次の文章の——線①④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違いまちがを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

友人と駅で待ち合わせをし、博物館へと向かった。そこは、① 想象以上の規模で、敷地内しきちには、② キシヤの複製が置かれていた。今回の目的は、動物の標本だ。標本の種類は豊富で、一日ですべてを見るのは不可能だった。③ 外国の馬や牛、ヒガ④ タに息する鳥など日常では見かけない動物たちに私は感動した。その一方で、羊の標本をやつと④ 拝めた④ と友人は大喜びしていた。無類の標本好きである私でも、友人のその感動を理解するのは難しかった。何はともあれ、終日楽しむことができた。大変満足できた日であった。

二 一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数に制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

① 映画やドラマを倍速で視聴する人が増えているという。ネットの動画サービスでは日々膨大な数の作品が配信されているが、ひとつひとつの作品をゆっくり観ている時間はない。それでも話題の作品は見逃したくない。倍速にしたり、興味のないシーンをスキップしたりすれば、限られた時間で多くの作品が観られる。

時間をかけずに効率的にポイントだけ押さえないという欲求は、いまにはしまったことではない。昭和の時代から、速読術の本をはじめ「この一冊で〇〇がわかる」といった本は人気だった。当時すでにビデオの再生速度のコントロールはできたそうだが、画質や音質が極度に劣化した。それが現在の動画サービスでは、映像や音の乱れもなく再生速度を変えられるようになった。そうした技術の進歩が倍速視聴の広がりを加速させている。

(中略)

倍速視聴の背景にある「むだな時間や労力をかけず、効率的にポイントだけを押さえない」という欲求が、人と人との関係に及ぶと、どうなるだろう。

※ SF作家の星新一のショートショート集『ボッコちゃん』(新潮文庫、1971年)の中に『肩の上の秘書』(1961年)という話がある。設定は近未来。その時代にはだれもが肩に秘書代わりにロボットのインコをのせている。

このインコは自分の主人のしゃべった本音を、敬語表現に直して、社交辞令やお世辞をまじえて言葉にしてくれる。同時に、相手のインコが話すまわりくどい言い回しを短く要約して伝えてくれる。人と人とは直接言葉を交わさず、それぞ

れのインコをとおして会話するのである。

この作品の中にセールスマンと主婦しゅふがやりとりするシーンが出てくる。セールスマンがある商品を取り出し「買え」とつぶやくと、インコが「きょうおうかがいしたのはほかでもございません。このたび、当社の研究部が、やっと完成いたしました新製品をお目につけようと思ったわけでございます」などと礼儀正れいぎしいセールストークにいいかえる。

それを聞いた主婦のインコはひと言、主婦の耳元で「買え、と言っています」とささやく。主婦が「いらぬわ」とつぶやくと、インコが「うちでは、とてもそんな高級品をそなえるほどの余裕よゆうが、ございませぬもの」といった婉曲えんきよくな断り文句にいいかえる。それを聞いたセールスマンのインコは耳元で「いらぬそうだ」と要約する。「そこをなんとか」とセールスマンが食い下がると、インコは「でもございませうが、こんな便利な品はございません」とさらに熱を帯びたトークを展開する。それを聞いた主婦のインコが「ぜひ買え、と言っていますよ」とささやく。主婦が「うるさいわね」というと、インコは「主人がまだ帰ってまいりませんので、いまはちよつと、きめかねるんですの」「本当に残念ですわ」という。セールスマンのインコがそれを「とさ」と要約する。あきらめたセールスマンが「あばよ」というと、インコは、「さよぶうでございますか。ほんとに残念でございます」とていねいな別れの挨拶あいさつを述べる。

② 半世紀以上前に発表された作品だが、いま、こんなアプリがあつたら需要じゅようがありそうだ。まわりくどい話や、まとまりのない話からむだな部分はぶを省いて、要約して伝えてくれる。さらに、感情的にならず、相手を傷つけずに返答してくれる。人と話すのが苦手な人には役立ちそうだ。現代のAI技術を使えば実現可能だろう。

しかし、ロボットインコには伝えられないものもある。語られた言葉を要約しても、その中に本当に伝えたいことがある 30

とはかぎらないからだ。とくに、ふだんの会話では、とりとめのないむだ話をしているうちに、ふいに「私がいいたかったのは、こういうことだった」と気づくことのほうが多い。

③ いったい、「むだ」とはなんだろう。私たちがむだと判断してしまうものは、本当に不要なものなのだろうか。

③ 話はとぶが、みなさんは小学校や中学校の思い出というと、どんなことを思い出すだろうか。運動会のこと、遠足や修学旅行のこと、だれかを好きになったことなど、人によって浮かんでくる思い出はさまざまだろう。だが、肝心の授業の内容<sup>かんじん</sup>を細かく思いだせるだろうか。

学校は勉強を教わる場所だ。だが、私の場合、授業で先生がどんな話をしてきたのか、ほとんど思いだせない。覚えているのは、友だちとふざけて怒<sup>おこ</sup>られたこととか、午後の教室にさしこむ西日のまぶしさとか、先生の着ていたジャージに継<sup>つ</sup>ぎがあたりついていたなど、授業の内容とは関係のない、どうでもいいことばかりだ。

それらは勉強をするという学校の目的からすれば「むだ」なことともいえる。だが、そうした「むだ」によって私たちの記憶の大半は形づくられている。だれかと会話をしても、会話の内容は数日すれば忘れてしまうかもしれない。あとになって思いだせるのは、そのときの相手の声の調子や表情、その日の天気、かかっていた音楽などの背景だったりする。

「むだ」とは、いわば効率性から外れた部分である。いいかえれば、目的からも意味からも解放された領域だ。しかし、じつは、その「むだ」こそが自分だけの人生の経験となり、固有のものの見方や感じ方を育てる。自分がたしかにそこにいて、なにかを経験したというあかしは「むだ」の中にある。

一方、効率性とは、たいていの場合、自分以外のだれかの都合に合わせるためのものだ。学校の勉強についていくため、

世間に遅れをとらないため、他人に迷惑をかけないため。自分のために効率性を求めているつもりだったのに、じつはまわりの都合に急かされていただけだった、ということもある。

人生でなにか「むだ」で、なにか「むだ」でないかは、だれにもわからない。むだだと思っていたことが、あとになって、とてもだじな事だったと気づくこともある。長い目で見れば、どれだけ多くのむだ<sup>④</sup>とつきあってきたかが、人生の豊かさにつながることもある。

(田中真知『風をとおすレッスン 人と人のあいだ』より)

※ 星新一：SF作家。ユーモアやサスペンスを生かした落ちをつける、とても短い小説の形式である「ショートショート」の名手として有名。

問一 〓線「配信」(1行目)の「信」と同じ意味で用いられているものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私信      イ 信用      ウ 自信      エ 信者      オ 信愛

問二 〓線<sup>ア</sup>(1行目)〜<sup>オ</sup>(14行目)「の」の中で、他の「の」と使い方が異なるものを1つ選び、記号で答えなさい。

問三 ――線①「映画やドラマを倍速で視聴する人が増えている」（1行目）とありますが、それはなぜですか。その理由

を説明したものとして適切なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 話題の作品を視聴していなければ周囲の人と会話できないから。

イ 視聴できないほど多くの作品が配信され続けているから。

ウ 技術の発展に伴い動画ともなを倍速で快適に視聴できるようになったから。

エ 魅力的な作品みりよくが巧みな広告戦略たくせんりやくによって多くの人に知られるようになったから。

オ 要点を短時間で効率的に理解したいという欲望を人間は持っているから。

問四

（25行目）に入る言葉として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 売れ                   イ 教えて                   ウ 帰れ                   エ 迷っている                   オ だまれ



問五 —— 線② 「半世紀以上前に発表された作品」(27行目)とありますが、この作品の紹介を通して筆者はどのようなこ

とを伝えようとしていますか。そのことを説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア インコによって「むだ」が略奪りやくだつされ、自分らしさを失くしてしまっている人間の姿。

イ 便利さに目がくらみ、コミュニケーションの本質を見失ってしまっている人間の姿。

ウ コミュニケーションを通して本来育まれるべき感情を持つことができている人間の姿。

エ 効率が良いように見えて、実際は効率的に動くことができている人間の姿。

オ 会話の中で育まれるはずだった真意を見出しづらくなってしまった人間の姿。

問六 —— 線③ 「話とはぶが」(34行目)とありますが、どうして筆者はここで話題を変えたのですか。そのことを説明し

たものとして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 「むだ」が人生の大半を占めるということを具体的な例を用いて説明するため。

イ 「むだ」が私たちの記憶に残りやすいということを具体的な例を用いて説明するため。

ウ 「むだ」が私たちの価値観を作るということを具体的な例を用いて説明するため。

エ 「むだ」が効率性の先にあるものだということを具体的な例を用いて説明するため。

オ 「むだ」が人の記憶を支配しているということを具体的な例を用いて説明するため。

問七 ——線④「むだ」(50行目)とありますが、筆者は「むだ」をどのようなものと述べていますか。「効率性」と対比しながら、75字以内で説明しなさい。

問八 この文章を読んだ5人の生徒が話し合っている場面である。本文の内容に合わない発言をしているものをア～オの中から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A—最近ではテレビだけでなくインターネットを通してたくさんの動画を視聴することができるようになりましたね。私もYouTubeをよく利用していますし、周りの友達もよくYouTubeの話をしています。

イ 生徒B—確かに、私の友人もYouTubeの話ばかりしています。実際、なりたい職業ランキングにも動画投稿者とうこうが入るようになりましたね。そのように多くの人々に注目されるようになったために、効率を求める人々が増え、倍速視聴を行うようになったというのが筆者の意見ですよね。

ウ 生徒C—倍速視聴を行う人々は、タイムパフォーマンス、いわゆるタイパを求めているんでしょうね。タイパは確かに大切かもしれませんが、効率を求めることは気づかないうちに他者の都合に振り回されてしまう可能性があります。す。

エ 生徒D—筆者もそのことを危惧きぐしていると思います。だからこそ、「むだ」が大切だといっていますね。「むだ」を嫌う一方きらいで、その「むだ」によってわたしたちは、かたどられている。そんな大切なことに気づかせてくれる文章です。すね。

オ 生徒E―私も普段は「むだ」に気づけません、ふとした折おりに思い出すことは、「むだ」なことが多いです。例えば、親友と仲良くなった経緯けいは思い出せませんが、その親友と遊ぶ中で出会った、気持ちの良い青空や、どこまでも続いていきそうな山道は今でもはっきりと覚えています。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

小学校6年生の主人公ジュンのクラスメイトであるケントは、ルイ、エリナ、カリナの教科書を切るといふ事件を起こしました。事件以降、ケントはクラスメイトから距離きょりを置かれ、そのことが原因で学校に来ることができなくなってしまいました。ケントが不登校になって2週間がたったころ、ケントの保護者が、自分の子供がいじめを受けていると学校に訴うったえて来ました。その後、授業の時間を使ってケントの現状に関して話し合うクラス会議が開かれました。クラス会議の中で宇野先生は一貫して、ケントを無視するのは良くないと主張しています。

5

「先生」

と、手をあげたのはミナだ。ジュンは、ひそかに驚おどろいた。ミナは教科書を切られた三人ではなかったし、なによりこういう場面で、自分の意見を言うタイプではないからだ。

「聞きたいことがあります」

全員がミナに注目した。

「どうぞ」

「夏休み前の、発表会の配役のことです」<sup>①</sup>

「発表会って、『注文の多い料理店』のことですか？」<sup>②</sup>

10

先生の言葉に、ミナが大きくうなづく。

七月に文化発表会というのがあって、ジュンたちのクラスは『注文の多い料理店』の劇をやった。

「ずっと学校を休んでいたアイリンに、精霊の役をやらせたのはどうしてですか？」

クラスがどよめきに包まれた。なに急に？ ケントの話じゃないの？ と、声が聞こえる。ジュンの頭のなかも、クエスチオンマークだった。

「その話はまたあとにしましょう。今はケントさんの話ですから」

先生はそう言ったけれど、ミナは強い視線のまま話を続けた。

「精霊の役はやりたい人が他にもいました。それなのに、どうしてアイリンを選んだんですか？」

劇では、原作にはない役も多く登場した。なかでも精霊役は出番も多く、いい役どころだった。ちなみにジュンは、木の役だった。ひゅーと風が吹いて、身体を左右にゆらした。アホみたいだと思いつつ、「ゆっさゆっさ」と声を出しながら身体をゆらしたことを思い出す。

「アイリンはずっと学校を休んでいました。練習にも参加していませんでした。それなのに、どうして精霊役に選んだんですか？ 精霊役をやりたい女子は他にもいたのに、なんでですか？」

めずらしくミナの語気が荒くなっている。

夏休み前まで、来たり来なかつたりだったアイリンは、夏休みあとからほとんど学校に来ていない。今日も休んでいる。

ごくたまに来れば、みんなで歓迎して、本人も居心地よさそうに見えたけれど、普段の授業の日は来なかつた。でも遠足

や運動会、家庭科の調理実習の日は登校した。

楽しいときだけ来ていいなあ、ずるいなあと、かげで言うクラスメートもいたけれど、ジュンは毎日学校に行って友達に会いたかったから、アイリンのことをいいとは思わなかった。でも勉強は苦手だったから、宿題やテストをやらなくていいのはうらやましかった。

「アイリンさんは精霊役をやりがっていましたよね。発表会の配役を決めるときに、みんなにアイリンさんを精霊役にしてくださいかと、ちゃんと聞いたはずですよ。多数決で決まりましたよね。これでアイリンさんが学校に来てくれるといいですね、という意見が多かったはずですよ」

先生が不満げな表情で言う。

「いやです、なんて言えない雰囲気だったからです。いやです、なんて言ったら、不登校のアイリンをいじめてみたいになっちゃいますから」

みんな、真剣にミナの見聞に耳を傾けている。

「わたしはアイリンのことを友達だと思ってるし、学校に来てくれればうれしいから、しゃべったり遊んだりします。でも、不登校だからという理由で、劇の役に選ぶのは違うと思います。学校に来ている人より、来ていない人のほうが得つてこれになります！ そんなのおかしいです！」

少しの間のあと、女子の何人かが小さく拍手をした。拍手は徐々に大きくなって行って、ジュンも拍手に参加した。ミナの言うことはもつともだと思ったからだ。

④「ちよっと待って」先生がみんなを制す。

「アイリンさんは、普段学校に来るのはむずかしいけれど、みんなと一緒に劇には参加したいと言っていましたよね。先生はその気持ちを尊重しました。わかりますか？」

「……でも！ じゃあ、アカリの気持ちは尊重しないでいいんですか？ アカリは精霊役をやるつもりで練習していました。最初、精霊役はアカリがやることに決まっていたからです。わたしもアカリに精霊役をやってほしかったです。一緒に50何度も練習したんです」

アカリは、ミナの親友だ。ミナは演劇が好きで、地域の劇団にも入って活動している。『注文の多い料理店』では、物語を引っぱっていく主役の山猫役だった。

「アカリは、精霊役をやるのをとても楽しみにしていました」

「もちろん知っています。だから、アカリさんにちゃんと説明して納得してもらいました。そうですね、アカリさん」

先生に問われ、アカリは今にも泣きそうな顔になった。唇をかんだままの状態で、まるで動けないみたいだった。

「みなさん。弱っている友達を助けていくことが大事だって、これまで何度も話し合ってきましたよね？」

「先生、あのときいちばん弱っていたのは、アカリです！ 先生なのに、そんなこともわからないんですか！」

ミナが声を張った。そこにいた全員が目を丸くして、ミナを見た。こんなミナを見たのは、はじめてだ。

ミナは怒っていた。ミナが怒るなんて……！ とジュンはものすごくびっくりしていた。びっくりして、そのあとは、ミナに対して申し訳なくなかった。七月の発表会するとき、ミナがそんな気持ちだったなんて、まったく知らなかったからだ。ア

カリが精霊役をやりたかったのは知っていたけど、アイリンには快く譲つたものだと勝手に理解していた。

「ミナさん、その態度はよくないです。言葉遣いに気をつけてください！」

これまで穏やかだった先生の顔が、一転して厳しくなる。と、ここでミナがしずかに泣きだした。先生が怖くてというより、緊張の糸が切れたみたいだった。

「……まあ、とにかく。劇のことはまた今度話しましょう。今は、ケントさんのことです」

仕切り直すように、先生が手をひとつ打つ。

「あっ、わかった！ そうか、わかったぞ！」

急にでかい声を出して、立ち上がったのはスカイだ。

「なんでミナが急に劇のことを言い出したのか、ずっと考えてたんだけど、おれ、今わかったわ」

ジュンはスカイに目をやった。

I 「スカイがきつぱりと言う。」

「先生が、少数派を優遇しすぎるってことです。義務教育で大事なものは、公平な指導だと思います」

先生はここでまた II を変えて、スカイをにらみつけた。

「弱いほう、人数が少ない側を大事にするのはわかります。でも、優遇するのは違うと思います。学校に来なくなったからといって、ケントがしたことはチャラになりません。人の教科書を切り刻むことは悪いことであって、まずはケントに反省してもらうのが先です。教科書を切られた女子たちが、ケントと口をきかないのは仕方ないですよ。そりゃあ、ムカつきま



すもん」スカイの口は止まらない。

「劇のことだつてそうです。アイリンがどうして学校に来ないのかはわからないけど、不登校だからって特別扱いあつかするのは違う。精霊の役に立候補りっこうほして、前々まねまねから練習していたアカリに降りおてもらつて、学校に来てなくて練習にもろくに参加してないアイリンにやらせるのつて、やっぱりどう考えてもおかしいですよ。精霊役をやらせてくれるなら登校するつて、そんなのおどしと同じじゃないですか？ てか、ただのえこひいきです。多様性の尊重そんちよう？ 人にやさしい取り組み？ ESGエスディージーズつばいことを意識してるのかもしれないけど、ちよつと違くないですか？ 逆差別になりますよ」

スカイが一気に言った。SDGs、前に学校に講師の人が来て話してくれたけど、なんだっけ。持続可能ななんか……？

「先生にとつての、ただのアピールだとしたらおれはがっかりです。もしくは声の大きい保護者に対していい顔を見せたいだけか」

「なっ……！」

「そうそう、バスケでも似たようなことがあつたな。うちのバスケチーム、女子が一人だけいるんだけど、試合のときにコーチが交代で出場させるんだ。その女子よりも、うまくて年数も長く続けているチームメイトがいるつてのに、他のチームへのアピールとして出すんだ。うちのチームは男女平等ですつてさ。まったくおかしな話だよ」

⑥ 「関係のない話をしないでっ！」

宇野先生の顔が赤い。

「アカリは捨て駒すこまだったんだ。ほんと災難さいなんだったよ。気の毒だ」

「なんてこと言うんですか！ だまりなさいっ！」

「先生。声がでかくなってますよ。話し合うときは、大きな声を出さないこと、ですよね？」

「スカイさんっ！」

般若はんじゃの顔で、先生が一步ふみだしたところで、

「ううっ、ひいーっく」

と、アカリが泣きだした。ミナがアカリのところにかけてよる。

ジュンは目⑦が覚めたような気持ちだった。なるほど、そういう考えもあるのかと、深くうなずいてしまった。不登校のアイリンのことはかりに目がいって、アカリのことを見ていなかった。見ていたとしても、アカリなら大丈夫だいじょうぶだろうと勝手に思ってしまった。

「ありがとう、スカイ！ 今のでよくわかったよ！ あときはわからなくて、アイリンの精霊役に賛成しちゃったんだ。

ごめん、アカリ」

思ったことがそのまま、ジュンの口から出た。

そのあと、なぜかクラス丸ごと、先生に怒られた。怒られたけど、ジュンはべつになんとも思わなかった。先生の言うことが百パーセント正しいとは限らないと、自分の頭でわかったからだ。きつとみんなもそうだったと思う。

「わたし、ミナのことをやっぱ好きだと思った」

と、わざわざジュンのところに来て言ったのは、ルイだ。

「おれにじゃなくてミナ本人に言えば？」

「スカイはやりすぎだけど、さすがだと思った」

「それもおれにじゃなくて、スカイに言えばいいじゃん」

ルイはジュンの言葉を無視して、有意義だったわー、と満足げに告げて去っていった。

(椰月美智子『ともだち』より)

問一 —— 線①「発表会の配役」(12行目)とありますが、配役が多くなるように工夫されています。その工夫を端的に示した一文をぬき出し最初の5字を答えなさい。

問二 —— 線②「『注文の多い料理店』」(13行目)の作者をⅠの語群から、その作者の作品をⅡの語群から、それぞれ1つずつ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ

ア 新見南吉      イ 宮沢賢治      ウ 椋鳩十      エ 谷川俊太郎

Ⅱ

ア 二十億光年の孤独      イ 大造じいさんとガン      ウ 銀河鉄道の夜      エ おぢいさんのランプ

問三——線③「語気が荒くなっている」(27行目)とありますが、この時のミナの気持ちはどのようなのですか。その

ことを説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前から抱いていた不満を宇野先生に伝えようと興奮している。

イ アカリのことを邪険じゃけんに扱あつかった宇野先生に激しい怒りを抱いている。

ウ クラス全員の注目を浴びているため緊張してしまっている。

エ 劇の話聞き入れようとしないう野先生の態度にいら立っている。

オ アイリンを気づかえない宇野先生に立ち向かおうとしている。

問四——線④「ちょっと待って」(46行目)とありますが、ここまでの「みんな」の様子を説明したものととして最適なも

のを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 関係ない話を始めたミナに対し不信感を抱いていたが、話を聞くうちにミナの主張の内容が理路整然りろせいぜんとしていた

ため、最後はミナの主張に納得している。

イ ケントの話から話題を変えてしまったミナに困惑こんわくしていたが、アイリンだけが得をしているというミナの意見を聞

き、最後はその話に共感している。

ウ 普段意見ふだんを言わないミナが突然劇とつぜんの話題を始めたことを不思議に思っていたが、ミナの指摘しできが的を射たものだった

ので、最後はその意見に賛同している。

エ 内気なミナがケントの話から劇の話へと急に話題転換てんかんをしたため驚いていたが、宇野先生にしっかりと立ち向かい続けていたので、最後はその姿に同調している。

オ ミナの突然の話題転換に面食らってしまったが、ミナが熱心に話すため徐々に心がひかれていき、最後はミナの意見が正しいと思うようになっていく。

#### 問五

I

(72行目)に入るものとして、最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生はおれの気持ちを理解しようとしていません

イ 学校に来ている生徒しか先生の目には入っていません

ウ ミナはアカリのこと心配だった

エ アイリンは少数派だけど優遇されていたんだ

オ ケントとアイリンの騒動せうどうは似ています

#### 問六

II

(74行目)に入る言葉として、最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 話題      イ 声色こわいろ      ウ 姿勢      エ 血相      オ 見方

問七

——線⑥「関係のない話をしないでっ！」(92行目)とありますが、このか所について生徒が話し合っています。生徒それぞれの解釈を読み取りつつ、発言の①③に入る言葉を指定された字数で答えなさい。ただし、①、②は本文中からぬき出し、③は自分で考えて答えなさい。

生徒A ここは関係のない話をしていないはずです。スカイはこれまでの話を踏まえた上で発言をしています。

生徒B 私は関係のない話をしていると思います。スカイのバスケットームにおける①(4字)の話とケントさんの話はつながらないはずです。

生徒C Bさんの意見に賛同できる部分もありますが、けれどもスカイのバスケットームにおいて女性は②(2字)ですから、それを優先するということは宇野先生の話とつながるはずです。

生徒B もちろんそうですが、バスケットームの話は校外の話であり、宇野先生はあくまで学内の話をしています。その観点から考えると関係のない話をしていると思いませんか。

生徒A 2人の話はそれぞれ正しいですね。スカイが所属しているバスケットームの話は、スカイと宇野先生それぞれの論理から考えると、関係があるかないかは答えを出すのは難しいように思います。ただ、身も蓋もないこと言ってしまうかもしれませんが、ここでの宇野先生の発言は、③(5字以内)の表れだったのかもしれないですね。

問八 —— 線⑦「目が覚めたような気持ち」(101行目)とありますが、ジュンはこの時どのような気持ちでしたか。そのことを説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 気づかぬうちにアカリを逆差別していたことに気づき、無意識の差別に恐ろしさを感じるとともに、今すぐアカリに謝罪したいと思っている。

イ 今までアイリンのことばかり考え、アカリのことを考えられていなかったことに気づくとともに、その考えは宇野先生と同じ考えだったということに驚いている。

ウ アカリばかりに辛い思いをさせていたうえ、その裏でミナが激しく傷ついていたことをかわいそうだと感じるとともに、その状況を作っていたことに申し訳なくなっている。

エ ミナやスカイの話を通して、自身も無意識のうちに少数派を優遇する視点になっていることに気づき、アカリに対して申し訳なくなっている。

オ ミナやスカイが宇野先生に対して反抗はんこうしてくれたことで、アカリを悲かなしませてしまっていたことに気づくとともに、偏見へんけんは無意識に構成されると理解し始めている。

問九 スカイは宇野先生の指導を——線「公平な指導」(73行目)ではないと批判していますが、あなたはこのスカイの主張をどう思いますか。あなたの考えを100字で書きなさい。

